
春とIS

シュガー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

春とIS

【Z-コード】

Z0220Y

【作者名】

シユガー

【あらすじ】

主人公篠ノ乃春は束と共にISの研究をしていた。そんなある日春は一夏に渡されるはずのISに手を触れ反応する。戸惑う春に対して束は千冬に春がISを操縦できる事を伝える。気づくと春は一人目の男の操縦者として、IS学園への入学が決まっていた。話は春が入学試験を受けるところから始まります。馴文ですがよろしくおねがいします。

入学試験 前編（前書き）

この小説は I.S インフェニット ストラトスの一次創作です初心者ですがよろしくおねがいします。更新は受験生なので一週間に一本のペースです。よろしくお願いします。

「へえこじがIIS学園かー、さすが国が作っているだけあるねー。」
とスースケースに座りながらオッドアイで長い金髪を一つにまとめた少年は眼を輝かせていた。少年はふと呟いた「千冬さん遅いなーまだかなー。」と校舎の方を眺めていると黒いスースを着た長身の女性、千冬さんが歩いてきた。織斑 千冬 春の幼馴染である織斑一夏の姉であり、春の姉である束の幼馴染で第1回IIS世界大会で総合優勝および格闘部門優勝を果たした世界最強の女性である。

千冬は春の前に着くと口を開いた。

「久しぶりだな春大きくなつたな？」

「久しぶりです千冬さん。ちなみに何で疑問系なんですか？」

「いや、最後に会つたときからあまり伸びていないなと思つてな。」

「伸びましたよこれでもーーそれにまだまだ伸びますーー！」

「せうかまあ良い時間が押しているので急ぐぞ。」

「え? 急ぐつてこれから何かやるんですか?」

「ああそういうれば何も言つていなかつたなおまえの入学試験をこれから行なう。」

「入学試験は何をするんですか?」と春は聞いた。

「教師と模擬戦をしてもらいつ。」

「分かりました。」

次回に続く

誤字脱字アドバイスなどおねがいします。

入学試験 前編（後書き）

初めての投稿でおかしい所があると思うので気づいた方はコメントおねがいします。

えーっとまあアイデアがないのでダラダラ書きます。

「IISが更衣室です。早めに着替えてください。」

「分かりました。」

と言いつつIISスーツの入った袋を受け取った。 疲れているのだろうか？ 今自分の目には145cmのサイズのIISスーツがある。しかし、どこからどう見ても、女物にしか見えない物がそこにはあった。仕方がないので先生を呼んで変えてもらつ事にした。 気分が悪い。女物のIISスーツを男なので男用のIISスーツに変えて欲しいと頼んだ。すると千冬さんを除く全員から、驚かれた。悲しいを通り越してどうでも良いと思えてしまつた。自分は身長はともかくそんなに女顔なのだろうか？ とまあ色々な事があつたが、自分は今自分のIISストライクを開いて待機している。

「模擬戦を開始します。」

模擬戦が始まった。日本の第一世代機 打鉄が近接戦用のブレードを開いて切り掛かって来る。それを左側にイグニッショブーストで移動する事で回避すると、武装の確認をする。

「ハアアア？」

思わず言ってしまった。なぜならばこのIISには頭部バルカンとアーマーシュナイダーという、小型のビームナイフの2つしか武装がなかったのだ。どうする？と思つた瞬間横殴りの衝撃が襲つた。

「何？」

ISのハイパーセンサーで見てみると、打鉄がいてブレードを構えていた。そしてイグニッショブーストで距離を詰めて来た。慌てて後ろに下がりつつ、バルカンを撃つ。

ドガガガガガガ！！

当たった。すぐにこちらもバランスを崩した打鉄目掛けてイグニッショブースト（瞬間加速）で距離を詰めて切り掛かる。しかし、次の瞬間にば打鉄は距離を、取り一気に後ろへ、回りこんで切り掛けってきた。避けようとした次の瞬間には、切られていた。次の瞬間ストライクは解除された。

「模擬戦終了勝者山田麻邪」

と音声が流れた。その時負けたと春は気づいた。

入学試験後編（後書き）

誤字脱字がありましたらすいません。アドバイスありましたら、よろしくお願いします。

入学式と自己紹介 前編（前書き）

すいません、文章力はありませんがよろしくおねがいします。

「ハア」

何でこうなったんだろう。

とため息をつきながら周りを見る周り全員女子であきらかに僕と一夏の「一人は様々な意味で浮いていた。校長先生が話している一夏達と一緒に小学校に行っていた頃の校長先生の話と同じぐらい眠くなってしまいそうだ。とまあなんとか無事に入学式も終わり教室でのんびりとしていた。一夏が自分の事を気づいていないのか、声をかけて来ないので、久しぶりと自分から声をかけた。

「え？誰。」

と返された。仕方がないのでこちらから篠ノ之春だと言う事を伝えた、東姉が話しているはずなんだけどなあ。とおもつていると一夏が声を掛けて来た。

「ひょつとして君が一人目のHを起動させることに成功させた男子?だよな。」

気のせいだろうか。今の一夏の言葉の中に?があつたようなきがした。しかしそれは、次の一夏の言葉で確定へと変わる。

「えーっと、やっぱり女子か男子の制服着ているから男子かもしれないとつたんだがごめん。」

春Side

一夏の目には僕は女子にしか見えていなかつたのか。悲しいを通り

越してどうでも良くなつたよー夏。

君は束姉が言つぱりじ勘が鋭くはなかつたんだね。残念だ。殺しても良こよね、束姉と思いつつエリを展開しようとしたが。

「全員揃つてますねー。それじゃあショートホームルームはじめますよー。」

教室は静かだつた。理由は極めて単純でクラスにてりを世界で初めて起動させる事に成功させた織村一夏と一畠田にてりを起動させた男なのか?篠ノ之春がいるからである。

「え、ええと、私はこのクラスの副担任になりました。山田真耶です。皆さん一年間よろしくお願ひします」

また全員が無言で反応はなく、真耶は涙田になつていたのであわてて、春がフォローに入つて泣かずにそのまま続ける。

「じゃ、じゃあ自己紹介をお願いします。えつと・・・・・・・・

出席番号順で織村一夏くん

また無言、女子の視線は一夏に集中する。一夏は気がつかないといつぱり眼がどこかを泳いでいる。

「織村君?あのー織村一夏君?・・・織村一夏くんつー」

「はーつ?」

声を裏返して返事をする一夏、クスクスとおもわず他の女子と一緒に笑つてしまつた。

「え、えっとそれじゃあ織村君、自己紹介を・・・

「あ、はい」

席から立ち上がり教卓へ向かい教卓の前に立つ一夏。クラス全員の視線を浴び固まっていたが、ようやく口を開いた。

「えーっと・・・・・織村一夏です。よろしくおねがいします。」

と言い口を閉じる、だが、僕やクラスの女子の思いはもっとしゃべつて欲しい等の「多くの意味が込められていた。そしてそこからしばらぐ沈黙が続く一夏は口を開き

「以上です」

ガタタツ！一夏の発言に期待していた僕や何人かの女子はイスから崩れ落ちた、趣味とか好きなものを喋ればいいのに、あつという間に終わらせてしまった。あまりのことにあの真耶先生も涙目になつていて。するとドオーン！とあり得ない音が響いた、一夏が恐る恐る後ろを振り返ると

「ゲエツ、関羽！？」

ドーンとありえない音が出席簿からした。角で叩かれたよつだ、

「誰が三國志のキャラクターだ馬鹿者」

そこには一夏の姉である折斑千冬の姿があつた、手にはいつもどおり出席簿をもつていた。

「あ、織村先生。もう会議はもう終わられたのですか?」

「ああ、山田君。クラスへの挨拶を押し付けてすまなかつたな」

死に掛けている一夏を後田に真耶と一緒に交わした後、千冬さんは喋り始めた。

「諸君、私が織斑千冬だ。君たち新人1年で使い物になる操縦者に育てるのがしごとだ私の言つことはよく聞き、よく理解しろ。出来ない者には出来るまで指導してやる。私の仕事は弱冠15歳を16歳になるまでに鍛え抜く事だ逆らつても良いが、私の言つ事は聞け。いいな。」

と言つと教室は静まり返る、そしてじしまりへると

「キヤ—————千冬様、本物の千冬様よ!」

教室中に黄色い声援が響く、あまりの音量に窓ガラスが震える。最近の女子高生は音波攻撃でもできるのだらうか?いやきっとできても何かしら不思議ではない。

すいません書きたいのですが母親と父親といつ爆弾が落ちてきたので明日残りを書かせてもらいます。申し訳ございません。

入学式と自己紹介 前編（後書き）

後日 明日の内にはなんとしても投稿します。

入学式と自己紹介 後編（前書き）

先程投稿できる環境になったので投稿します。

「ずっとファンでした」

「私、お姉さまに憧れてこの学園に来たんです！北九州からー。」
等すごい数の声が聞こえた。肝心の千冬さんを見てみると溜め息をついていたがその後一夏を見るなり

「で？挨拶も満足にできんのか、お前は。そしてお前まだ自己紹介すらやっていないのか？って聞いているのか、お前は・・・」

「み、耳があ————」

頭の次に耳をやられてしまった。一夏はまだづくまつていた。

「何をやっているのだ馬鹿者が！」

一夏が何か言おうとしているけど出席簿で本日3回目となる出席簿アタックを喰らって喋るに力を辞めた。

「織斑先生と呼べ」

「…………はい、織斑先生」

やり取りが終わった時には一夏が千冬さんの身内だと語った事を知られるのには十分であった。

「えっ？織斑君ってあの千冬様の弟……」

「それじゃあ、男子で『ヒー』を使えるっていうのも、それが関係

して・・・・

「ああっいいなあ。代わって欲しいな」

と他の女子達が騒ぐ千冬さんは何事もなかつたかの用にスルーし

「まあいい、篠ノ之、次はお前だ」

「えつ僕ですか？」

「もうださつをとしる」

千冬さんに急かされ席から立ち上がり教卓の前に立つすると全員の視線は春に集まる。ドイツギリスフランスの3国を束と一緒に2年ごとに移り住んでいた春は普通に挨拶を始めた。

「僕の名前は篠ノ之春です。趣味はゲームと読書と写真を撮ることです。よろしくおねがいします」
と言つた。すると

「へえ僕つ娘か良いわね。あの顔と声のアンバランスさが良いわね。
後身長も体格も。」

「肌白いわねー日本人とは思えない」

「金髪にあの金と銀のオッドアイ、かわいいわね。」

等色々言つていた。のでとりあえず春はいった。」

「僕は男です。」

と言つた。するとクラス全員から驚かれた。やっぱり女にしか僕は

見えないのかと落胆していた。」

すると

「篠ノ之弟もう良いぞ席に戻れ」

と言われたので席に戻った。その後の自己紹介はあんまり耳に入つてこなかつた。

SHRが終わつた。

すると隣の一夏が話しかけてきた

「俺は織斑一夏よろしくな男子同士仲良くしよ」

と言つて手を差し出してきたので僕も手を出した。

すると、確かに上沼さん？が篠ノ之君×織斑君もありね等叫んでいた。
はあ・・と

溜め息をつきたくなつた。がそれと同時に予鈴がなり全員が席に着いた。

授業が始まつたので授業に意識を切り替えた。

「・・であるからにして、ISの基本的な運用は国家の認証が必要であり、枠内を逸脱したIS運用をした場合は刑法によつて罰せられ・・・」

授業も順調に進んでいて東姉に教えてもらつた部分の発展だつたの

である程度は分かったので大丈夫だつたが隣の一夏は教科書に穴が開くほど見ていたのでまさかとは思つたが念のために聞いた。

「一夏どうかしたの分からないの？」
と聞いた。すると案の定予測していた回答が出てきた。

「ああ、全く分からん。」

「織斑君、どこか分からぬ所がありますか？」

と春と一夏のやり取りが聞こえたのか真耶が聞いてきた。

「えつと、いいですか」

「はい、分からぬ時のために先生はいるのですよ」

「全部分かりません」

「え・・・・・」

一夏の一言によつて僕を含むクラスにいる全員が固まつた。

「・・・織斑、入学前の参考書は読んだか？」

ダースベーダーのBGMが合いつづなオーラを出した織斑先生が聞いた。

「古い電話帳と間違えてすてましつ」

ド「ゴーンー。

本日 4 回目にして最大の破壊力をもつた。出席簿アタックが一夏の言葉が終わらない内に一夏を机と書いた名のマシューへと吊りつけた。

「必読と書いてあつただろうが馬鹿者」

「・・・すみません」

「後で再発行してやるから 1 週間以内に覚える。いいな」

「い、いや、1 週間での厚さは難しいよつな・・・」

「やれと書つてこる」

「・・・はー、やります」

自業自得だと思つ。

「HIS はその機動性、攻撃力、制圧力と過去の兵器を遙かに凌ぐ。そういう『兵器』を深く知らずに扱えば必ず事故が起る。そういうための基礎知識と訓練だ理解が出来なくとも覚える。そして、まもれ。規則とはそういうものだ」

千冬はそう言つた教室の端へ戻つていった、固まつていた、真耶も復活し授業は再開したのであつた。

ふう、指が痛い。次回はセシリアさんの登場です。

機体設定（前書き）

春の使用するIISの設定です。ガンダムSEEDのストライクに
+何かオリジナルで盛ります。馴文ですいません。

機体設定

ストライク

第3世代機

機体設定

春の専用機。3種類のストライカーパックというパックを換装することによって遠距離戦や近距離戦、高速機動戦など様々な状況にも対応出来る機体。

固定武装

10mmバルカン2門

ミサイルの迎撃や敵を牽制するために使う。2門あり1門に50発しか入らないため無駄使いは出来ない。×2で弾は100発

アーマーシュナイダー×2

ナイフ。内部に爆薬とバッテリー兼モーターがあり、モーターで刃を高速振動させ、装甲に刺すことが可能。更に刃に爆薬を搭載しているのでそのまま爆発させて相手にダメージを与える事が可能。

PS装甲

装甲に電流をながす事により、装甲を硬質化し実体剣や実体弾を無効化する装甲。これによつてシールドエネルギーが減る可能性はバツテリー切れでPS装甲が切れる事と威力の高いビーム兵器による攻撃を除いては無い。尚PS装甲は一定の電力供給によつて行われているので、実体武装に当たれば当たる程電力消費はかさんでいき、エネルギー切れになつてしまふ可能性が高まる。

ノーマルストライク

ストライカーパックを付けていない状態のストライクこの状態のストライクはバッテリーの容量が少なく4分程しか戦えない。。武装は10mmバルカン（ヘッドバルカン）×2門。弾丸の数は50發ずつと少なく牽制や接近するミサイル等の迎撃に使う。

アーマーシュナイダー × 2

接近戦用のナイフ。刃の中には爆薬を搭載しており、相手の装甲に突き刺した後、爆発させる等して爆弾として使えるほかに、中のバッテリーで刃を高速振動させて、切れ味を上げる事ができる。

機動力、スピード1500km/hと共に第3世代で武装は第2～第3世代初期の攻撃力しかなく、4分程でエネルギー切れになる。
近接戦闘用。航続距離111km

ランチャーストライカー

武装

53mm高エネルギー・ビーム砲 アグニ

3mを超える砲身が特徴でその重さ故に支持アームを使わなければ、撃つ事が出来ない。ランチャーストライカーのメイン武装にして第4世代に匹敵する火力のビーム砲連射可能。又その火力故に1回でかなりのバッテリーを消費し、20発撃つただけで、バッテリー切れになってしまふ。エネルギー消費が最も激しい武装。

58mm2連装ガンランチャー

誘導弾、無誘導砲弾双方を射出可能2発搭載出来る。

20mmバルカン

ガンランチャーの防衛装備。弾薬数は300発と多い。中近距離向
けの武装。攻撃力は強く、敵を寄せ付けない。

ランチャーストライカー用シールド
機動力の低いランチャーストライカー用に作られたシールド。ビ
ームコーティングがされており実体装備には弱いが、ビーム兵器には
強く、こわれにくい。

機動力第2世代スピード第3世代1500km/h 航続距離11
25km 武装第4世代 遠距離戦の装備 戦闘継続時間2分～
45分

エールストライカー

高速機動装備エール

高速機動用の4つの高出力スラスターと4つのラジエーターも兼ね
た飛行翼を持っている。高速機動による戦闘に特化したパック18
00km/hで一時間の飛行が可能。高速機動戦の装備

ビームサーベル×2

粒子をトンファー状に展開して剣として使用する。攻撃力は第2世
代末期の攻撃力以下だがエネルギーの消費が少ない。

シールド

エールストライカー用のシールドで実体武装に強く灰色の鱗殻と第
4世代
の武装を除く攻撃に耐える。パイルバンカーの攻撃も2回目まで

耐える。ビーム兵器もスター・ライトによる攻撃を受けてもある程度は持つ。

6mm高エネルギー・ビームライフル

中・近距離工ール用装備で取り回しが利く上に200発も撃て、更に片手で撃てるのでよい。威力はセシリ亞さんのスター・ライトにやや劣るが第3世代相当の性能を持つている。

高速機動戦向きでエネルギーをそんなに消費しなく扱いやすい。機動力、スピード1800km/hで共に第4世代で航続距離は1800km/hで武装は第3世代初期の攻撃力 戦闘継続時間1時間～1時間30分

ソードストライカー

武装

ビームブームラン・マイダスマッサー

近接戦用のソードストライカーに付けられた装備。奇襲やフェイントに使う。また、大容量のバッテリー・コンデンサーを搭載しているため、単体での飛翔が可能であり、切れ味が高いため相手の装甲を切り裂く事が出来る。また、爆薬が搭載されているので、相手に当ててから爆発させる事でダメージを与える事が可能である。第2世代末期の攻撃力をもつ。

ロケットアンカー・パンツァーアイゼン

アンカーで相手を捕捉もしくは相手の装甲を破壊する。しかし、特殊纖維のケーブルであるため扱いづらい上に、ケーブルの特性を理解して瞬時に判断して使わなければならず、扱いがかなり難しい。破壊力第3世代。

2・76m接近戦用ブレード「シユベルトゲーベル」

全長2・76mと言うストライクの全高に匹敵する長さをもつ近接戦用のレーザー・実体刃複合近接戦ブレード第2世代の装甲ならば、一撃で絶対防御を発動させるだけの切れ味を持つまた、切つ先からもレーザー刃を展開する事が出来る。接近戦での取り回しの悪さをカバーする。接近戦用の装備

機動性第4世代相当スピード第2世代程度900km/h武装第4世代航続距離750km 戦闘継続時間30～45分

すいません。何かあつたら「コメント」をクリックして下さい。

主人公設定

名前

篠ノ之春

身長

145cm（身長や容姿の事を言わると怒る）

性別

男（女にしか見えない）

容姿

華奢で体は丸みを帯びて、肩幅も腰も同年代の女子よりも細く、肌はセシリ亞並に白い。また金髪にナノマシンを両目に入れられて、金と銀のオッドアイ。ちなみに両目共に眼に適合していない。10人に10人が振り向く美少女また声からしても女子。

春「僕は男です！！」

備考

日本で生まれる、両親は日本人で眼、髪共に黒だった（このころも女子に間違えられた）。6歳ごろまでは普通に過ごしていたが7歳になる前後に両親を事故で亡くす。又その時に両親が大量の遺産を持つていたため親戚の遺産争いに巻き込まれ、結果的に決まった親戚に引き取られるが、遺産を取るだけ取ると、春の戸籍を友人が勤めていたるドイツの研究機関（無許可）に引渡し春を捨てる。そのため春は心を失ってしまう。尚一年後に特殊部隊によつて他の数人と共に保護される。また二年間の間にナノマシン『ヴォーダン・オージュ』を両目に入れられた、更に反射神経の強化や聴覚の強化をされISに乗れる事が判明するがランクはDと乗れるだけだったためランクを上げる為に薬物で上げさせられていたその最中に保護された。またその後イギリスで2年間カウンセリングと薬物を体内から取り除く治療を受ける。その後ナノマシンの制御の仕方を身に付ける為ドイツに帰国して一年かけ身に付ける。その後篠ノ之束に出会いいフランスで一年過ごす予定だったが一夏に渡す為に作つていたIS白式につづかり触れてしまい、ISに乗ることがばれてしまい更にIS適正がAだつたためISに行く事になる。一人称は僕。

主人公設定（後書き）

やばい、テスト終わってなんかはじけた。

ドイツ代表候補生とイギリス代表候補生の衝突 前編（前書き）

すいません設定追加で春はドイツ代表候補生です。名前は篠ノ之春を日本にいる間の一時的な名前にして感想にアリアを入れて欲しいと要望があったのでボーデビッヒアリアを本名にします。

ドイツ代表候補生とイギリス代表候補生の衝突 前編

二時間目の休み時間、一夏は死んだ魚のような目をしながら机に突つ伏していた

「一夏、大丈夫？授業分かった？」

「…………まったく分からん」

完全に授業についてゆけず頭から煙が出ていそうな一夏を春は心配する

「まあ、僕も分かるとこなら教えてあげるからがんばってとりあえず追いつこう」

「うう、すまん春」

と他愛もないやり取りなのだがその場面を必死にメモしたりスケッチをしている女子が何人かいたが春は気にも留めずに一夏に教えていると

「ちょっとよろしくて？」

「ん？」

「はい？」

一人の女子生徒が立っていた、長い金髪にブルーの瞳をしたきれいな白人の少女だった、でも春は何故か彼女の纏っている雰囲気が

好きになれそうになかった。

「聞いてます？　お返事は？」

「ああ、聞いてるけど……どういふ用件だ？」

「聞いています、イギリス代表候補生の貴女が何の用ですか？」

「まあ！　なんですか、そのお返事。わたくしに話しかけられるだけでも光栄なのですから、それ相応の態度といつものがあるんではないかしら？」

「…………」

少女の上からな物言いに春は不快感を覚えた

「悪いな。俺、君が誰か知らないし」

知つておかないと駄目だよ！」はーと春は心の中で突っ込む

「わたくしを知らない？　このセシリア・オルコットを？　イギリスの代表候補生にして、入試主席のこのわたくしをー？」

「あ、質問いいか？」

一夏が手をあげてセシリアに質問する

「ふん。下々のものの要求に応えるのも貴族の務めですわ。ようしぐれよ」

「代表候補生って、何？」

ガタンッ！――一夏のこの質問にはさすがの春もあきれ椅子から落ちた

「あ、あ、あ・・・」

「『あ』？」

「あなたっ、本気でおっしゃりますのー！？」

セシリアは無知すぎる一夏に腹を立てたのか怒り出した。と春は間に入り一夏に分かりやすく丁寧に教える

「一夏、代表候補生って言つのはHUAの国家代表の候補生の事で国から専用機が与えられるんだ。いうなればエリートで僕とセシリアさんはそれにあるんだ。」

「なるほどな・・・・・って事は春も専用機を持っているのかー！？」

「うん、ドイツ代表候補生で専用機の名前はストライク。三種類のパックを呼び出す事によつて高速機動戦、接近戦、遠距離戦と一機で様々な状況にも対応出来るよつと作られた機体だよ。それに実体兵装は効かないよつになつているよ、まあさすがに衝撃は来るけどね」

と話してみると

「やつー、エリートなのですわー！」

と話している一人に指を指しながら話すセシリ亞

「本来ならわたくしのような選ばれた人間とはクラスを同じくすることだけでも奇跡……幸運なのよ。その現実をもう少し理解していただける?」

「そうか、それはラッキーだ」

「……馬鹿にしていますの?」

「特に、大体、あなたISについて何も知らないくせに、よくこの学園に入れましたわね。男でISを操縦できると聞いていましたから、少しくらい知的を感じさせるかと思つていましたけど、期待はずれですわね」

「俺に何かを期待されても困るんだが。ここに入る以前は普通の男子中学生だったんだからな。なあ、春?」

「う、うん」

残念ながら春は、普通ではなかつた。

「え? あなた男でしたの? ……」

「ふん。まあでも? わたくしは優秀ですから、あなたののような人間にも優しくしてあげますわよ」

「結構です」と春は言いたかつたが外交問題になつてしまつのであえて言わなかつた。

「HISのことでわからないことがあるれば、まあ泣いて頼まれば教えて差し上げてもよくつてよ。何せわたくし、入試で唯一教官を倒したエリート中のエリートですから」

「EISを動かして戦つやつなら、俺も倒したぞ・・・春はどうなんだ?」

「・・・・・　僕は機体の武装が固定武装しかない状態でやつて負けたよ」

「は・・・・? わ、わたくしだけと聞きましたが?」

唚然とするセシリヤに一夏は追い討ちを掛ける

「女子ではつてオチじゃないのか？」

「」の一言で完全に地雷といつ地雷を踏みつくなセシリアの顔は赤くなつた

「あ、あ、あ、あなた、わたくしをぶ・・・・・」

セシリアの言葉を遮りチャイムが鳴った

「くっ・・・・・、話はまた後で。逃げないことね！ よくつて！

?

そう言いながら自分の席にセシリ亞は戻つていつた。

「まだ立っている奴、ひとつと席につけ」

「どうやら二時間目は千冬が授業をするらしいへ、真耶はノートを手にしている。

「ああ、授業の前に再来週行われるクラス対抗戦に出る代表者を決めないとな」

「意味が分からぬいらしく一夏は首を傾げていたとこを千冬が全員に聞こえるように言う

「クラス代表者とはそのままの意味だ。ちなみにクラス対抗戦は、入学時点での各クラスの実力推移を測るものだ。今の時点でたいし差はないが、競争は向上心を産む。一度決まると一年間変更はないからそのつもりでいる、まあ、俗に言えば学級委員みたいなものだ」

教室内が少し騒がしくなった、すると一人の生徒が手をあげて

「はいっ、それなら私は織斑君を推薦しますっ！」

「あたしもそれが良いと思いまーす」

「じゃあ、私は篠ノ之君に」

「私も」

と言つた、それに便乗し数人が一夏に票を入れる、さうに春にも票が入れられる。

「候補者は織斑 一夏に篠ノ之 春……他にはいないか? 自

薦他薦は問わないぞ

といひで春は口を開いた

「すいませそ、でしたら僕はセシリアさんを推薦します」

「お、俺つー?」

「一夏は同じタイミングで反応するがその声よりも先に反応した声があつた。

「あ、貴方私を誰だと思つ・・・」

「イギリス代表候補生だと思つています、また、イギリスのブルーティアーズについて知りたいので推薦をしました」

「せつ、先生こんな事おかしいですわ」

と怒りに震えた声で言つが

「辞退は認めんぞ」

と無情な千冬の声が響く

が怒りが収まらないの一夏に的が移つた

「実力から行けばわたくしがクラス代表になるのは必然。それを、物珍しいからという理由で極東の猿にされては困ります! わたくしはこのような島国までEIS技術を修練しに来ているのであって、サークスをする気は毛頭ございませんわ!」

侮辱もエスカレートしていく

「いいですか！？ クラス代表は実力トップがなるべき、そしてそれはわたくしですわ！」

触れぬがためと見てみぬふりもをしていた春も見過^じせなくなり会話に乱入するが

「大体、文化としても後進的な国で暮らさなくてはいけない」と自体、わたくしにとつては 「

とこ^こで春は口を開く

「イギリスだつて大してお国自慢ないだる。世界一まずい料理で何年覇者だよ」

「いいかげんにして下さいこれ以上恥を晒すのはやめてください他の代表候補生の質が疑われます」

一夏も切れていた様で春と一緒にタイミングで言つ。

春にいたつては周りの女子と同じ声でありながらものす^じこオーラを醸し出していた

「あ、貴方、わたくしの祖国を侮辱するのですか…！」

「侮辱？何を言つてゐるのですか、それは貴女です、僕は注意をしただけです」

「ああ、やつだな

「決闘ですわ！」

一人を指差し、セシリ亞が宣言する

「ああ、いいぜ、やつてやるよ」

「受けて立ちます、政府から機会があればイギリスの第三世代機を倒せといつ指示があつたばかりなのでやらせてもらつます」

春と一夏もやる気十分であつた。

「言つておきますけど、負けたりしたらわたくしの小間使い いえ、奴隸にしますわよ」

「ああ、いいぜ。小間使いでも奴隸でも何にでもなつてやるよー。」

「いいですよ、でも、僕は負ける予定はありませんが」

と言つた後、三人は睨み合つた。

「さて、話はまとまつたようだな。それでは勝負は次の月曜日。放課後、第三アリーナで行つ。織斑とオルコット、篠ノ乃是それぞれ用意をしておくよ。それでは授業を始める」

千冬は手を二回叩き授業を開始した。

(絶対に勝つ)

春は気に入らない女、セシリアに勝利するための算段を立て始めた。のだった。

どうですかね？少し春が黒くなっていますが

ドイツ代表候補生とイギリス代表候補生の衝突 後編

セシリアの決闘宣言から時は経ち、放課後になつた春はあれから授業そつちの内で、さら^ニ昼食の時になつても尚対セシリア戦の戦術プランを立てていた。（あまりの集中で一夏の声も耳に入らなかつた）

「ああ、織斑君に篠ノ之君。まだ教室にいたんですね。よかつたです。」

「「はい？」」

呼ばれて顔を上げると、麻耶が書類を片手に立つていた。

「えつとですね、一人の寮の部屋が決まりました。篠ノ之君と織斑君の部屋は申し訳ないですけど相部屋となります。」

麻耶の手には、部屋番号の書かれた紙とキーが握られていた。それを、一夏と優希に渡す。

IS学園は全寮制であり、生徒は全員寮で生活することが義務づけられている。これは将来有望な生徒達を勧誘する様々な国から守る為の措置である。

「俺の部屋、決まってないんじゃなかつたですか？前に聞いた時に、一週間は自宅から通学してもらつて話でしたけど」

「やつぱりそうなりましたか」と春は苦笑する。

「それなんですか、事情が事情なので一時的な措置として部屋割りを無理矢理変更したらしいです。・・・・一人とも、そのあたりの「」とて政府から聞いてますか？」

「どうやらドイツ政府の指示らしかった、なんせ前例のない『男』のH.I.S操縦者なのだ、国としても監視と保護の両方を兼ねているのだろう。

「そう言つわけで政府特権もあつて、とにかく寮に入れるのを最優先したみたいで、一ヶ月もすれば一人の方も用意できますから、しばらくは我慢してくださいね」

「そうですか、部屋の件はわかりましたけど、荷物は一回家に帰らないと準備できないです、今日はもう帰つていいですか？」

「わかりました」

「あ、いえ、織斑君の荷物なら・・・・」

「私が手配しておいたやつだ。ありがたく思え」

と、千冬の声が聞こえたとき某BGMが脳内に流れたのは春だけではないはずだ。

「「あ、ありがとうございます」」

「まあ、生活必需品だけだがな、篠ノ乃のほうは先に持つて来ていたようだな助かった」

「じゃあ、時間を見て部屋に行ってくださいね。各部屋にはシャワーがありますけど、大浴場もあります。学年ごとに使える時間が違いますけど・・・・えっと、その、織斑君と篠ノ之君は今のところ使えません」

「え、なんですか？」

意味がわかつてないらしい一夏は、真耶に聞いたのだが

「アホかお前は。まさか同年代の女子と一緒に風呂に入りたいのか？」

と千冬に言われジト田で見られるのだった。

「おっ、織斑君つ、女子とお風呂に入りたいんですか！？ダ、ダメですよー！」

「い、いや、入りたくないです」

一夏は慌てて否定したが

「ええっ？女子に興味がないんですか！？そ、それはそれで問題のよつな・・・・」

麻耶の方は暴走していた

「織斑君、男にしか興味ないのかな・・・・？」

「それはそれで・・・・アリね」

「相手は篠ノ之君・・・・これだわ！！」

と麻耶は叫んでいたの + 一部女子は騒ぎ出す、その光景に春は溜め

息を吐くのであつた。

「えつと、それじゃあ私達は会議があるので、これで。」

「あつ、織斑先生。少し宜しいですか？」

「どうしたんだ篠ノ乃？」

教室から出て行く千冬たちを春は呼び止めるのだが、鞄を持ち帰ろうとしていたのだが、春の行動に気づき、話に入ってきた。

「あ、一夏。僕、ちょっと織斑先生に話があるから先に帰つていいよ」

「え、なら俺待つけど」

「ううん、ちよつと長くなつたから、いいよ

一夏待つと言つが春はやんわりと断つた

「やうか、じゃあまた後でな」

教室から出て行く一夏を春は見送つた

「もついいのか、篠ノ乃？」

「はい、織斑先生、届いたパックの性能試験をしたいのでアリーナを貸して欲しいのですが。それと放課後のアリーナの使用許可も」

「EISとアリーナをか・・・・分かった、後で職員室に来い。今から私達は会議だからな・・・一時間後に来い」

春の申し出に千冬は悩むじぐれをしてから、職員室に来るよつて言つた。

「わかりました」

「では、私は行くわ」

「はい、お時間取らせてすみません」

「別に構わん」

と千冬は教室から出ていった、春は腕時計を見た。

「ん~、一時間か、どうしようかな?」

空いた時間をどう過ごすか悩む春

「あつ、やうだ」

何か思い出したのかポケットに入れて、部屋番号の書いてある紙を取り出す

「とつあえず部屋に行こう、まずはそれからだね

と春は寮の自分の部屋に向かつ春であった。

「うん、いいだね1046号室キーーっと」と

「十一」

と声がした確認をしてから中に入る

すると中には着ぐるみをきた女子がいた

「えーっと、初めまして今田かい、この部屋に越してきた篠ノ之春です、よろしくお願ひします」

と挨拶を済ませる

が返事はない見て見ると寝ていたので荷物を置いて部屋を出る

そしてやる事も無く外を歩いていようと

すぱあんっ！と音が響いた音のした所へ行つてみるとそこには竹刀を片手に倒れた一夏と何事もなかつたかのように立つてゐる筈がいた。そのあと30分程一人を見てから職員室へと向かつた。

ପାତ୍ର, ପାତ୍ର

「失礼します。織斑先生はいらっしゃいますか」

「ん？ 来たか篠ノ之。 こっちだ」

扉をノックしてから職員室に入り、千冬のことを尋ねる。すると千冬はこちらに気づいたようで春を呼び寄せた。

「EISの武装テストと、アリーナの使用許可だつたな

「はい」

「データの採取は一人で大丈夫か?」

千冬は聞いてきたので大丈夫ですと答える。

「はい、国家機密なので」

「そうか・・・では、これがアリーナ使用の申請書だ。」

千冬は五枚ほどの紙を春に渡す

「明日から使いたければ六時までに提出しろ、書くなら私の隣を使え、急げば間に合つだらう」

現在の時刻は五時三十分。一枚、六分の計算である。

「うわ、時間無いじゃないですか。」

千冬の隣の席に座り大急ぎで申請書を書き出す春であった。

「五時四十五分二十秒、余裕じゃないか」

千冬は最後の書類を確認し判子を押した。

「ま、間に合つた」

「ああ、これで明日から使えるんだ」

何とか時間内書き終えた春は机の上に突つ伏していた

「しかし、お前は行動が早いな、あのバカに見透かせたいくらいだ」

弟のことを思い出し、溜め息をつく千冬

「……篠ノ井、お前は本気でオルコットに勝つつもりか？」

「当たり前ですよ。勝つつもりじゃなかつたらあんなは啖呵切りませんよ」

千冬の問いに、筆記用具を片付けながら答える春

「同じ代表候補生でもセシリアとお前では倍以上の運用時間の差がある勝ち田は薄いぞ」

「わかつてます。そのために練習するんです」

「そうか……なら、せいぜいがんばれよ

「はー」

と同時に春は職員室を後にした

終わった

クラス代表戦（前書き）

今回はセシコアさんやられます。

クラス代表戦

あれから武装テストや練習をしている間にクラス代表戦当日になつたが結局射撃が得意なのでランチャーストライカーとエールストライカーの二種類に絞つて練習を行なつた

ビットで準備をしてくると一夏は口を開いた

「なあ、 篠」

「なんだ、 一夏？」

春達はアリーナのビットで戦いの時を待つていた

「気のせいかもしれないんだが、 IISの事について何一つ教えてもらつていらない

その言葉を篠は何事も無かつたかのよつに聞き流す

すると一夏は諦めたのか春に話しかけた

「なあ、 今更だけどIISについて何一つおしえてもうつてないんだが何か今すぐ出来る事は無いか」と言った

苦笑いしながら春は言った

「無理…………」

それを聞いた一夏は落胆する。すると音声で指示が入ってきた
「篠ノ之君ビットゲートに行つて下さー織斑君の機体の到着に時間が掛かるので先に行ないます」

それを聞いた春はストライクを展開してビットゲートに向かつた

「一夏、じゃあ行つて来るよ」

「頑張つてこいよ
と声をかける

「篠ノ之 春、ストライク出ます
と言つて空高くスラスター光を残しながら飛んで行つた」

春はゲートから出るとランチャーストライカーを展開してセーフティを外しながら先にアリーナに出ていたセシリ亞と高度を合わせる。

「あら? 逃げずに来ましたのね」

そこにはブルーティアーズを身に纏つたセシリ亞腰に手を当てたボーズで浮いていた。手にはデータにあつたスター・ライトmk-?が握られていた。また6個のビットもついていた

「それにしても遅かったですね。てっきり、もう一人の方と負けの」

「代表候補生としての自覚を持つて下さー、いい恥さらしだ」と答える、すると

「言いましたわねっ！」

と顔を真っ赤にしながらストライク田掛けで撃つて来たがそれを春はランチャード用シールドで防ぎ後退する。そしてビットを撃つには最適の条件にした。するとチャンスと思つたのか何かを言ひながらビットをこいつちの思惑通りビットを開する

「来た」

と右目の射撃用のナノマシンを活性化させビットに狙いを定める

「いけっ」

三連射してビット一つ落とす。更に20mmバルカンでセシリアに命中させる。セシリアは慌てて回避するがそれと同時に残り5個のビットを一つ残らず落とした。そのこの別の所では

「す、」いですねえ篠ノ之君、私でも勝てなかつたビットをこいつも簡単に落とすなんて

と麻耶は感嘆の声を上げる

「ああ、でもいかんなあれば、機体の性能に頼りすぎている」と千冬は言った

「確かに言われて見れば」と改めて気づいた麻耶

そのころアコーナでは

「喰らいなさい！」

とスター・ライトで春を追い詰めるセシリアの姿があった。

「勝てる！勝てますわ！」

と思つていたセシリアだったが、次の瞬間それは覆られた

「負けてたまるかあつ」

と追い詰められていた春がシールドでセシリアのライフルを防ぎながらアグーを2発放つ。

するとその一発は肩のアーマーに命中した。

セシリアが怯んだ瞬間を見逃さずミサイルを一発放ちながら残った20mmバルカンでセシリアを牽制する、ミサイルがセシリアのスター・ライトに命中した。その瞬間スター・ライトは爆発した。そしてランチャーストライカーの武装を使い切つた春はランチャーストライカーを解除して腰からアーマーシュナイダーを一本出しセシリアに突っ込む。

「なんですか？」

と言いながらインター・セプターと叫びブレードを展開して切り結ぶ。

「勝たせてもううー」

と春が言いヘッドバルカンを放つ

「それはこっちのセリフですわ」

とセシリアが言い返しながら回避する。

どちらも満身創痍だが諦めておらず、春はバルカンで牽制をしつつ切り結んでいた。

アリーナの客席からは一人に声援が送られる。

が、終わりは唐突に訪れた。「これで終わりだー」と春がブルーティアーズ被弾箇所にアーマーシュナイダーを投げ爆破させて一気に

突っ込んでブルーティアーズの右マーキュピレーター」と切断して被弾箇所に突き入れた爆破させた。「試合終了 勝者 篠ノ之春」とアナウンスが流れた。

「よ、よし勝つたぞ・・・・・・」

「貴方大丈夫ですか？」

と声を掛けるが

「な、何とかね・・・・」と言い高度を下げ着陸する。すると周りからは一人に対しての声援が鳴り響いた、そして一人はIRSを解除して互いに握手をかわした。すると周りからは黄色い声が上がる中には「可愛い」などの声が多く含まれていて溜め息をつきながらビットに戻るのであった。

クラス代表戦（後書き）

駄文ですが、どうでしたか？何か問題ありましたら、感想お願いします

クラス代表戦 中編（前書き）

やばい日付が変わった

クラス代表戦 中編

「まさか連戦で戦う事になると、
と疲れた顔でビットゲートへ向かう春。春はなぜ連戦で戦うハメになつたのか回想を開始した。

「つ、疲れた・・・」

と疲れた顔でビットに戻つて来た春を待つていたのは予想外としか思えない一人だった

「やつと戻つてきましたか」

と麻耶が言う。嫌な予感しかしなかつたので恐る恐る春は聞いてみた

「あのーそれはどういふことですか?」

と聞いた春だが次の麻耶の言葉を聞きそれは現実となつた

「実はですね、予想よりも早く織斑君の専用機が届いたので前倒しでオルコットさんとの試合を行なう筈だつたんですが・・・」

「え・・・行なう筈だつたつて事はオルコットさんが戦えなくなつたつて事ですよね、何ですか?」

と春が聞くと

「それはおまえとの戦闘が原因だ」

と後ろからおぞましいオーラを纏つた声が聞こえてきた。千冬の声だと分かつた春は地雷を踏まないよう注意しながら恐る恐る聞いた

「あのーひょっとして先程の試合が原因ですか?そんなにダメージを与えたつもりはなかつたんですが」

と言つたがその声に会話」を中断されていた麻耶が反応した

「えつとですね、さつきの試合でオルコットさんのHSのダメージレベルがJに達していく休ませないといけないので篠ノ之君と織斑君の試合を前倒しで行なうことが決定したので伝えにきたんです」と胸を張りながら答えた麻耶

「え？ 拒否権は？」

速攻で春が言つた

「篠ノ之君はオルコットのHSにダメージレベルJといつてオルコット対織斑戦を実質延期にしたな」と怒気を含めた声で春に伝える

「ええ、確かに僕がしてしまいました」

と怒気に押された春が血の気が引いた顔で答える

「それに、本来はオルコットと織斑の試合が予定されていたがそれがお前によつて延期になつた、つまりだここまで言えば篠ノ之分かるな？」

と春に問いかける

「は、はい分かります！」

と震える声で答える春

「せうか、それを聞いて安心した」と普通になつた千冬が言つた

「よし、戻るぞ山田君」

と言つた。終わつたと思つた春がホッと息をつくが

「試合の開始は三十分後だそれまでに一人とも準備をしておけ」と千冬の声が響く

謀られた！！と思つた春だつたが反論する氣力も残つていなかつたので

「わ、分かりました・・・・」

と言いその場に座り込む

その言葉を聞いた千冬が今度こそは本当に戻つていった

謀られたと思いながら準備に取り掛かる春だがうじろから

「大丈夫か？」

と一夏が心配そうに声を掛けてきた

「そんなわけないでしょ・・・・」

と弱弱しい声で答える春

「どうあえず一夏は自分のT-Uの慣らしもしていいんだから先にしたほうが良いよ」

と春は言い一夏と別れてヘッドバルカンの弾丸とアーマーシュナイダーの補給とストライクの整備をすませてビットゲートに行つた

回想終了

回想を終えストライクを展開した春がビットゲートから出て行つた

「一夏はどこかなー」

と言いながら一夏を発見した春は高度を合わせてオープンチャンネルで一夏に話しかける

「一夏、そのT-Uの名前は？」

と尋ねる

「ああ、こここの名前は白式だ」と一夏は答える

「とりあえず初心者と言つても手加減しないから」と言いエールストライカーを展開してビームライフルで一夏に照準を定める

「ああ。いつも負けるつもりはない勝たせてもううせ春」

「望む所です倒させてもらいます」

と同時にビームライフルを放つが一夏はそれを左に瞬間加速する事で防ぐがそこにヘッドバルカンの弾の嵐に突っ込みシ・ルドエネルギーを減らす。

「グワッ！！！！！」

衝撃に驚いた一夏が思わず声を上げて止まる。その隙に残ったヘッドバルカンの残弾とビームライフルを撃ちながら後退して高速機動で白式を翻弄する。200発の内180発を撃ち終えた所で一度擊つのを辞めた

白式は何とか飛んでいたが装甲は所々はげ絶対防御が発動してもおかしくない状態だった

「これならこっちの勝ちは決まった」

と春は思いながら残つた20発で白式に回避行動を取らせて誘導して追い込む、そしてエネルギー切れになつたエールストライカーを収納してアーマーシュナイダーを投げつけて起爆させた。

「勝った」

と笑みをこぼしていた春だったが次の瞬間爆発した煙の中からブレードを持った白式が飛び出してきた

「そんなバカな！？」

と慌ててもう一本のアーマーシュナイダーでブレードを受け止めるがここであり得ない事が春の田の前で起きた。

「超硬貨金属で作られたアーマーシュナイダーが切り落とされた！？」

とそのままの事に気づき慌てて回避しようとすると

「ガニッ！……！」

とモロにブレードの攻撃を喰らいつたまじい衝撃を春を襲つ

「クッ……！」

とすぐにマヒで機体を立て直し機体をチェックする。

「なつ！？PS装甲を貫通しただつて？」

とSEが最初600あつたのに対し350と一撃げ250も減らされた事に固まつた春だったが次の衝撃でまた300というSEをまた失つた春は回避行動を開始して使つつもりのなかつたソードストライカーを開いてシユベルトゲーベルを開いて切り掛かる

「やられてたまるかあつ……！」

と切り掛けた白式に・・・・・

クラス代表戦 中編（後書き）

続きは後編で書きます

クラス代表戦 後編とその後（前書き）

あ、焦つた

クラス代表戦 後編とその後

「やられてたまるかああつ！」

とその声を聞いた一夏は切り掛かるとしたストライクを見た

「なつ！？まだ他のパックがあつたのか！」

驚きを隠せずに固まる一夏、一夏のSEはビームライフルによつて削られているため発動タイミングを考えなれば、一夏の負けが確定するのに対しパック換装によつてエネルギーがフルになつていた。どうするかと思つた瞬間

「よそ見をするなあ」

と叫びながらシユベルトゲーベルのレーザー刃を展開して春が切りかかるが、剣道によつて鍛えられた反射神經と技術力で春の攻撃を全てかわしていく

「くつ！なんで当たらないの？一撃の重さはこっちが上なのに」と言いながら切りかかつてくる春の攻撃を最小限の動きで零落白夜を用いずに弾いたりして難なくその攻撃をかわす。

「くそつ、だつたらこれで」

と言い斬り合いに持ち込むために接近して、パンツィアーアイゼンで白式の右腕をクロ一で切断しようと出力を上げるがそれに気づいた一夏がワイヤーを雪片式型で切断する。ところで春が口を開いた

「一夏、言い事教えてあげるよ、それには高性能の爆薬が搭載されているんだよ」

と笑顔で答える春

とつそにクロ一を破壊しようとした一夏だが

「遅いよ、一夏」

と言い白式の右腕に付いたパンツアーアイゼンを躊躇つそぶりもみせずに自爆させる
とその瞬間アリーナは一面爆発によつて発生した煙で何も見えなくなる。

徐々に煙が晴れて白式が姿を現したがその右手首から先をじつそり失い、白かつた装甲も所々が黒ずんでおり損傷のひどさが見て伺える状態になつていた。

「やつてくれるな春」

と千冬以上のオーラを出しながら冷静になつた一夏が雪片式型を左手に構えて切り掛かるとするがマイダスマッシュサーを牽制のために投げるが

「邪魔だ！」

と最小限の動きでマイダスマッシュサーを、雪片式型で両断して尚も瞬間加速で突つ込みながら切りかかつってきたが

「試合終了勝者 篠ノ之春」

とアナウンスが響き思わず

「えつー!？」

「なつー!？」

と素つ頓狂な声を上げる

「な、何でだ?」
と一夏が喋るが

「後で教える、とりあえず他のクラスも使うからすぐに戻れ」と千冬に言われ二人は戻った

「貴様は、何をしてくれた（怒）」「春は完全に切れた千冬に怒られていた。

千冬はそれ程怒っていない（さっきの2倍30%）らしかったがそんなのはウソで人間から出せるとは思えない殺氣に怯え涙をこぼしながら、震えながら話を聞いていた。

「「ゴッ、「ゴメンナサイ」

と本気の本気で謝るが

「「ド「ンッ！————！」

と春の首のすぐ横にブレードを刺しながら千冬は言つ

「そんな、簡単な一言で済むと思つてているのか」と笑顔で言う千冬、そんな見るに耐えない状況に笄、セシリ亞、一夏が春を助けようとするが、

「大丈夫だよっとお話をするだけだ、そうだよな春」と小柄な分細い肩に手を置き力を少し込める

「ツツ！————！」

と声にならない悲鳴つを上げる春

「チヨッ、それい————」

と一夏が言いかけるがそれをセシリ亞と笄が口を止める

「一夏さんこれ以上口を挟んだら春さんが」

と言いながら春を見るとそこには恐怖により泣きじゃくる春と笑顔（切れた）の千冬の姿があり全員が固まつた

「ど、どひある（ただ）」
と三人で悩んでいると

「何をしているんですか！」
と声が響く

「救いの手が来た」

と全員が振り向くがそこには麻耶が立っていた

「どうした、山田君？」

と最大時の50%まで切れた千冬が言つが

「先生会議です、先生がいないと始まらないので来て下さい」と言いあつてに取られた千冬を引っ張つていつた。

姿が消えると即座に春の元へ駆け寄るが

あまりの恐怖に意識を失いながらも

「ごめんなさい、許してくださいごめ。。。」

と尚も泣きながらつぶやく春の姿があつた

口説（漫畫版）

イージスとかの他のS E E Dの機体を出してみたい

ג' ע' ע' ע' ג'

といふながら春は『覚める』とは部屋だった。

一 気がついたか春大丈夫か?」

と一夏が声をたけた

「うん、大丈夫だけど、試合終わつた後からの記憶がないんだ」と言つたがその言葉に一夏は

「世の中には知らないほうが良い事があるんだ」と言い急ぎ足で部屋から出て行つた

「んーーー追い出せないな」と言いながら春は今歩いていた

「はーはー大丈夫ーー

と同室の通称のほほんさんが声を掛けてきた

「うん大丈夫だよご飯食べた――？」

とのほほんたんに囂くと

「ううん、まだよ——」

と言つたので

「じゃあ、一緒に食べようよ」

とのほほんさん

二二九

と断る理由もないのでは

「じゃあ、また後で——」

と言ひ歩いていると

「春さん大丈夫ですか？」

とセシリアから声をかけられたが先に言ひ事があつたので言ひ

「オルコットさん——の事……ごめんなさい」

と謝るがその返答は意外なものだつた

「ええ、大丈夫ですわそれとセシリアと呼んでおひらひで構いません
わ」と言ひ握手を求めてきたので春も手を出して握手をする

助かった!!!!!!!!

と思いつつのはほんわかの方に行ひつとすると

「クラス代表について話したいことがありますわ！」
と言つてきた。

「え？ 代表やんないとダメですか？」
と答える春

「いいえ、実は一夏さんを代表にしたいんですね
良かつたあああー！ と思いつつそれに賛同すべく

「ええ、僕もあれが工Uを一回田であそこまで使えるなんて、代表

にしたらひと皮むけますよ

と言い一夏を代表にさせる「メントを言い一夏を代表にして副代表の座を勝ち取った

「はーはー早く——」

とのほほんさんが春を呼ぶ

「あ、すいませんまた明日」

と言い席に行つて食事を取つた

代表決定（前書き）

家族から嫌われる悲しいね

代表決定

翌日教室に行くと一夏が声を掛けてきた。

「おはよー、春」

と眠たげな顔の一夏が言った

「おはよー、一夏」

と言つて席に座る

「HRを始めますよー」

と言い麻耶が言いHRが始まった

といいでクラス代表が一夏だという事が伝えられ一夏が仰天した
「え、何で俺なんですか普通に考えて春やセシリアじゃないんです
か?」

と反論するが

「それは私が辞退したからですわ!」

とセシリアが追撃をかけ更に

「一夏はHRを起動させて一回田なのに代表候補生の僕を圧倒させ
たんだよ、それだったら、代表にして力を付けさせたほうが良いで
しょ」

と一夏を褒めるが

「じゃあ、一人とも試合に出ないのかと言つてみると

「大丈夫だよ一夏、僕も副代表で出るから」と言つ

「よ、良かった」

言い安堵の息を着く一夏

「がんばって一夏」

と言い一夏に全てを託した。

「ああ、分かった」

と話しているとチャイムが鳴ってHRが終わった。

織斑一夏の災難 前編

知識を詰め終えた春達は4月の下旬にはHSの飛行訓練を開始していた

「これよりの基本的な飛行操縦を実践してもらひ。織斑、オルコット、それに篠ノ乃。試しに飛んでみせろ」

春は腰に付けたナイフに手を当てて集中してHSを展開させる

「おいで、ストライク」

その瞬間春の体が粒子につつまれた。粒子が消えるとそこには、メタリックグレイの状態のストライクがいたが遅れてPS装甲が起動して鮮やかなトリコロールに色が変わる

「きれいですね」

とセシリアがつぶやく

「すごいな、それ！」
と一夏が言つ

「まあね」

とフルフェイスのマスクと全身装甲から良く分からぬが嬉しそうな声で春が喋つていると

「よし、飛べ」

と言わされたので、スラスターを噴かしてセシリアにやや遅れながら

上昇する。一夏は更に遅れながら上昇していた。そして、セシリアと同じ高度で停止する。

『お速いですわね。春さん』

とプライベートチャンネルでセシリアが話しかけてきたちなみに二人の仲は、春が副クラス代表になったと日の夜にセシリアが部屋にやつてきてお互いの暴言を謝り合つた時に、春がセシリアを部屋に招き入れて話し合つていたら自然と仲良くなつていた。（春が満面の笑みで「これで友達ですね」と言った瞬間セシリアは春の可愛さに抱きしめたい衝動に駆られたのは内緒である）

「いいえ、違いますよストライクの性能が高いだけです」と答えるが

「いいえ、スペックもありますが結局は使う人間の腕ですわ、春さん」

「いえいえ」

等と話していると白式が遅れてやつてきた

「つ、疲れた」

と言つていると

「何をやつている。スペック上の出力では白式はブルー・ティアーズとストライクよりも上なのだぞ」と千冬さんからお叱りを受けた急上昇と急降下のイメージが掴めていないらしく春とセシリアに聞いてきたが春とセシリアはイメージは人それぞれで違う事を知つてるので自分が一番やりやすい方法を模索する方が良いという事を伝えるが一夏は

「何で浮くのか自体分からんんだよ」と白式の翼状の推進機関を見て呟く一夏だが

「説明しても構いませんが、長いですわよ? 反重力力翼と流動波干涉の話になりますわよ」

難しい言葉を聞いた一夏は即座に断り春に聞いたが

「「」めん、一から説明するから4時間は掛かるよ」と言つた。

「いいえ、結構です

と即座に断る一夏

「でも結局慣れちゃえば気にならないよ」と言つた

「それに今日もやるんでしょ」と春は言つた

あの試合が終わった日から一夏は春とセシリ亞によつて徹底的に鍛えられていた。最初の頃は一夏の幼馴染の雛がしていただ抽象的な表現で教えていて全く一夏が理解出来ていなかつたの春とセシリ亞の一人が教える事になつたのである

セシリ亞の知識は理論的すぎて分かりにくいがそれを理解出来る春が一夏に分かりやすく教える事によつてお互いの欠点をうまく補いながら教えていた

「ああ、するぞ」

『一夏つーいつまでそんなどこにいるー早く降りて来いー』

と麻耶からインカムをひつたくりオープンチャンネルで通信を入れてきた。セシリアと篠は現在一夏をめぐつて戦つてるので腹を立てたのだろう。と分析をしていると

「織斑、オルゴット、篠ノ乃、急降下と完全停止をやつて見せろ。目標は地表から十センチだ」と指示が入る

「了解です。では一夏さん、春さん、お先に」

と、二人に言つとセシリアは地上に向かつて急降下する。そして地表十センチのところ完全停止した。

「やばい…………！」

と思いながら春も地上に向けて急降下を行なう

（基本を思ふ出せ）

と言いながらあと少しで衝突するといつ所で全スラスターを吹かし停止する

「140mかもう少し待つても良かつたな、その調子で練習すれば次は出来るはずだ努力しろ」と言われたので

「はーっ、ありがとうございます」「……？」
と言ふ息をつくが

「はーっ、春頬むどいでくれ……！？」

「フニッ？」

と慌てて確認するとそこにはまつ日前に迫っていた白式の姿があった

とその瞬間に体中に凄まじい衝撃が春を襲つた。周りでは大量の土煙が上がりまわりにいた女子が悲鳴を上げるそして徐々に土煙が晴れていくとそこには大きなクレーターができていたその中心には。

「い、いてて」

「きゅううー」

一夏ケダモノが春（美少女）を押し倒しているような状態が出来上がつていた。二人とも先程の衝撃でISを解除されており生身である。そして、一夏の両手は春の胸に伸びており、はたから見れば完全に気を失っている美少女をケダモノが襲つている図であつた。そこを見逃す女子生徒ではなく。

「…………キヤアア…………」

「…………」。

先程とは違う意味でクラスメイト達が悲鳴を上げる。

「お、織斑君と篠ノ乃君、決まりだわ！！夏はこれで決まりよ！！」「力、カメラが、こんな時カメラさえあれば…………」「やっぱり、あの二人そういう仲だつたのかな、キヤ…………」「うわあ、篠ノ乃君つてやっぱり美人だよね…………」「…………じゅるり」

その悲鳴で意識が戻つた春は状況を整理してとりあえず一夏の手を
どかそうとしたが脳がフリーズした一夏はそのまま、言つてはなら
ない一言を呟いてしまった

「可愛い」

と。それを聞いた春はストライクを展開しランチャーストライカー
を展開して零距離で20mmバルカン
を放つ

更にそこには一人の修羅が現れた。

「春さん混ぜてもらつてよろしくて？」

と笑いながらスタートライトを構えるセシリニアと

「一夏死ね！！！」

と打鉄に乗つた篝が叫ぶそして

「あれを早い内に殺りましょ！」

と笑いながらアグニを至近距離で一夏田掛けて放つ春

「一夏覚悟しろ（しなさい）」

と残つたふたりも全力で一夏を殺しに掛かる最終的にこの戦いは授
業が終わるまで（白式が飛べなくなるまで破壊するまで）続けられ
たのだった

「うへ、体中が痛え」

とうめきながら一人で淡々と片付けとグラウンドの穴埋めをする一
夏の姿があつた

「責任を持つて全てお前が片付ける、3人の話を聞く限り原因はお

「前だ」

と言われ他の皆が授業をしているのにただ一人である事になつたことを思い出しながら一人で頑張る一夏がいた

「お、終わった」

と言いながら一夏はボロボロの体を引きずつて寮へと戻つていたが

「一夏、訓練は」

と満面の笑みを浮かべながら走つてくる春と修羅たちの姿があつた二人に至つてはどす黒いオーラを出しながら来ていた

「やばいいいいいい！」と逃げ出す一夏だったが田の前に緑色の光線が駆け抜ける。おそるおそる振り返るとそこには

「逃げちゃダメだよ一夏」

とホールストライカーを装備したストライクで向かつてくる春の姿と一人の修羅がいた

「だ、だめだ」

とあきらめた一夏はおとなしく訓練をする事にするが・・・・

「一夏おそいや、殺つちゃうよ」

とジームライフルで狙いを定める春に

「殺らせてもらいますわ」

スターライトで無表情のセシリ亞による波状攻撃

「・・・・・・」

と無言で切り掛かる篝がいた

言つなれば一夏は今3対1で訓練といつ名の処刑を受けていた。無論専用機が大破した一夏は打鉄に乗つてゐるが、第一世代一機で第二世代一機に勝てるわけも無く

「さやああああああああああああああ！」

と叫びながら被弾に被弾を重ねていき・・・・・・

「くそおおおおおお！」

と叫びながら停止して止まつていた

が3人は「」である事に気がつく

「これつて・・・・やば」

と言い慌ててアリーナから出て行く

「た、助かつた」

と息をついている

織斑一夏の災難 前編（後書き）

続きあとでかきます。

「た、助かった」

と息を整えながら打鉄から降りるとセシリアは、

「一日に一回も問題とはいい度胸だな織斑」

とセシリアは出席簿を一夏めがけて振り下ろす千冬の姿があった

「千冬姉違つんだ、これには理由が…」

と言おうとする

「問答無用！」

と言いトヨコモードになつた千冬に出席簿で殴られて意識を失つた一夏がいた、その頃3人はといふと

「いただきます」

と食堂で食事を取つていた

「纂さん、セシリアさんやりすぎわちやいましたね」

と笑いながらケーキを食べる春と一人の姿があつた

「いや、むしろ足りないくらいだ」

と纂は言ひセシリアは

「あれくらいがちょうどいいのですわ」

とセシリアは言ひ

「あと少し遅かつたら確実に捕まりましたね」と話しあげて休憩していた。

「クラス代表戦に出れるのか?」と篠が言つと

「今日のあれだと確実にダメージレベルは〇近くまで?????????」

と言つ春だが

「そうだ、だからお前が代わりに出る」と片手で一夏を持った千冬が言つた

「その声に驚き振り返る
とやうには千冬がいた。

とりあえず春は「分かりました」といって出るところだった。

おかしい

パーティと写真撮影（前書き）

頑張りう……………

「一夏」メン・・・」

「いや、気にはすんな・・・」
と歩きながら話しているのは春と一夏である。一夏は凹んだテンションで喋り、春は土下座をしていそうな声で喋っている。最も一夏に至ってはクラス代表戦のために練習した日々が無駄になり代表から外されてしまい無表情で話している（副代表はセシリアになった）。が一夏が無表情なのは代表就任パーティが自分のせいでやや残念な雰囲気になつているからであるが・・・。

「はいはーい、新聞部でーす。話題の新入生、織斑一夏君と篠ノ乃春君に特別インタビューをしに来ました～！」

と何故かこのタイミングで来た新聞部の一年生の薫子が最大の原因でもあつたりする

「まずは織斑君すばり、クラス代表になつた感想をどうぞ～」

薫子は一夏にすずいとボイスレコーダを向ける、その瞳は子供のように無邪気に輝かせていたが次の一夏の言葉で大変な事になつた

「すいません、俺の専用機損傷がひどくて代表戦に出れないんです
代表は春ですよ」

と凹んでいる一夏、周りを薫子が見渡すと「ハハ・・・」と乾いた笑いをする春と自分は関係が無いと言わんばかりに顔を背ける筹と副代表になつたセシリヤがいたが、薫子は一人ではなくこの状況を改善するために春に狙いをさだめ

「篠ノ乃君、代表就任の感想をどうぞ………」

「えつと、とりあえず代表候補生としても代表としてもがんばらせてもらいます」

「えつと、とりあえず代表候補生としても代表としてもがんばらせてもらいます」
とそれらしき言葉を浮かべ喋ると

「うーん、良いねえ」

と「」ながら、次の狙い目掛けて向かって行く薰子の姿があった

「セシリ亞ちゃんもコメントちょうだい」

と「」が

「わたくし、こうしたコメントはあまり好きではありませんが、仕方ないですわね」

「コホン。ではまず、どうしてわたくしがクラス代表、副代表を辞退したかといつと、それはつまり・・・・・」

「あー長くなっちゃうだから写真だけちょうどいい、文章は適当に作るから」
とセシリ亞に見切りを付けた薰子は

「何で一夏君の専用機壊れたの？」

と一夏にボイスレコーダーを向けている薰子の姿があり

「やばい（ですわ）」

とそれに気づいた一人が止めに入るが・・・・・

「いや訓練中に3対1で春とセシリアと戦つて落とされてその後ダメージレベルを見たらCを超えていて話す一夏

逃げろ！！！と即座に思った二人はそこから逃げ出そうとするが

「どうこの事かな——詳しく述べさせてもらひよ——」

ボイスレコーダーを向ける薰子の姿があった。仲間を探すが
セシリア

「いな
い！
！」

が・・・・・・・

と言いながらすでに先に逃げていた事に気づき逃走を謀りつとする

「つかまえたつ

と逃げ出す間もなく薰子に捕まる

「何で――？」

とボイスレコーダーを薰子が向けるとそこには

「え、え!!? あの、そ、それま

と涙目になりながら喋りつとする春の姿があった。それを見た女子は

と頭の中で言つていたがその隙をついて脱出する春の姿があつた

「〇、疲れた

と言いながら逃げ切った春が外を歩いていると

「見つけたー」

と言う声が聞こえた振り返るとそこには女子が数人、逃げようとする

るが前からも

「発見！！！」

とカメラと携帯を構えた数人の女子がいた

逃げようとするが逃げ切れるわけもなく、パーティを行なつていた食堂に連れ戻される春とセシリアの姿があつた。どうなるんだ！と考えていた春とセシリアだつたが

「はいはい、三人並んでね。写真撮るから」

「注田の専用機持ちだからねー、はいはい並んで並んでー」

卷之三

とセシリアと一夏の事を考え氣を利かした春が左へ移り真ん中に一夏を移らせるが・・・・・

• • • • • • • • • • • • • • • •

「なんだよ、鷲」

「何でもない」

と言ひの筆の姿があつた

「それじゃあ撮るよー。35×51÷24はー?」

と言うが誰も分かる訳がなく

「正解は74・375でした」

と薰子の声が響くが・・・・・・

その瞬間にクラスの女子全員が神業としか見えないスピードでカメラに収まっていた。

「なんで全員入ってるんだ? ていうか何で簞が隣にいるんだ? ってか全員?」

と一夏の声が響く

「・・・・・／＼／＼

「あ、あなたたちねえつー」

「マーマーマー」

「セシリアだけ抜け駆けはないしょー」

「ねー」

「ひ、ぐ・・・」

セシリアは文句を言おうとするがクラス全員に丸め込めよつとするがセシリアは苦虫をかみつぶしたような顔になる、それをクラスメイト達はニヤニヤしながら見ていたのであった。

その姿を見ながら春は苦笑していたが、その田の前ではセシリアと簞がにらみ合っていた

となんだかんだでパーティーは10時ごろまで続いた

「ね、眠い」

と言つながら部屋へと戻る春だが部屋へ戻る前に力尽き廊下で寝て

いた。

「ふう、今日は大変だつた」

と語りながら簞と一緒に部屋に向かい歩く 夏だが

「あれ？ あれって春だよな」

「よつこいらせつと、軽いな32~33kgがいいかな?」
と言しながら春を抱き上げる一夏だが

（女子にしか見えねえ）
と思いながら運んでいた

「ふう、じーだよな春の部屋」と言しながら部屋の扉を叩く一夏

「はい」

とのんびりとした声が響くとりあえず開けてもらう事を頼み、扉を開けてもらい春を部屋に運び入れる一夏だがいきなりのほんが春の服を脱がしていた

「なつ？」

分程経つた所で と言い慌てて後ろを向く一夏だがその顔は真っ赤になつていたが5

「おつむーー！」ち回こてもここかーー

とのほほんの声が響き落ち着いた一夏が顔を向けるが

「へーっへーっ

とのほほんと同じ着ぐるみ？パジャマを着た春の姿があつたそれを
見た一夏は異性にしか見えないと想いながら慌てて顔を背けたがそ
こには筈がいた

「あのーほつ・・・・・

と喋らうとした一夏目掛けて木刀を振り下ろす。一夏がかわそそうと
するが一夏の脳天に命中し一夏は氣絶した。その一夏を引きずりな
がら、筈は出て行つた。ちなみにその後筈によつて一夏が抹殺（精
神と肉体共に）殺されたのは言つまでもない。

パーティと写真撮影（後書き）

終わりました。問題あつたらコメントお願いします

いやあ、文を作るのは難しい

中国代表候補生との出会い

「ふう、疲れた」

と言いながらストライクの整備をする春がいた

「大体、代表候補生なんだから専用の整備士がいても良いのに」と愚痴をこぼす春。春の専用の整備士は後日来ると言つ話だつたが来ずやむなく整備をする春がいたその頃

「ふうん、ここがそうなんだ・・・」

夜、IIS学園の正面ゲート前に、小柄な少女が立っていた。

その後一人は出会つ事になる

「ふう、やつと終わつた」

と言ひながら歩いていた春はボストンバック片手に道に迷つた様子の少女を見つけたので声を掛ける

「あのーどうかしましたか?」
と声をかける春

「ここに行きたいんだけどここの中場所分かる?」
と道を聞く鈴

「えーっと、本校舎一階総合事務受付ですか、分かりますよ」と笑顔で答える春、それを見た鈴は

(・・・・・つは!?)なによこの可愛や、ずるずるがない)

と思ひながら道案内を頼んだ

「口ツと微笑む春に少女は見惚れるのであつた。

（同姓のあたしでもドキドキするなんて）

どうやら少女は春のことを同姓だと思つてゐるらしい。そんなことは知らずに春は少女に話しかけるのであつた。

「あ、はい分かりました、着いて来てください」と言い案内をする春

「せういえまだ名前も言つてなかつたわね。私の名前は凰鈴音、あなたは？」

「僕は、篠ノ之春です、ドイツの代表候補生ですそして一人目の男です、よろしくおねがいします」と答える春

「えつ、篠ノ之ってあんた日本人なの？ってか男なの…………」と驚く鈴

「いや、男ですし、一応日本人なんですけど……」と話す春に

「…………ホントに？」と疑いがちに話す鈴

「本当です！ホラツ

と言ひながら生徒手帳を出す春、そこには男と記されていた。それ

を見た鈴は

「うわつ、ホントだーーー。」

「だから、やつ言つてゐるぢやないですか

「あはは、『メン』

と言にながら生徒手帳を春に返す鈴

「えーと、凰わん」

「鈴よ」

と話してみると校舎が見えてきたので

「ユリがそですよ」

と言つて本校舎一階総合事務受付に連れて行く春。道案内を終え戻ろうとすると

「私のこと、鈴でいいわよ」

「えつと、じゃあ僕は春で構いません」

と言つて話していると鈴が一夏が何組なのか聞いてきたので一組だと答えるとありがとうと言つて受付に向かつ鈴がいた。とりあえず終わつたと思つた春は着替えるべく部屋に向かつた

中国代表候補生との出会い（後書き）

すいません、文章力がないので就任パーティと鈴の登場シーンを分けました。何か有りましたらコメントおねがいします。

気合だーって何やつてんの俺

翌日

「一夏、おはよー」

「おう、春おはよう
と話していると

「織斑君に篠ノ乃君、おはよー。ねえ、転校生の噂聞いた?
と近くの女子が話しかけてきた

「転校生? 今の時期に?」

と首をかしげる一夏だが春は

(ひょっとして鈴さんかな?)
と考えている

「あー、わたくしの存在を今更ながらに危ぶんでの転入かしら」

「ひいらの会話を聞いていたのかセシリ亞が腰に手を当てたポーズ
を決めながら話しに入ってきた更に

「一のクラスに転入していくわけではないのだひー・騒ぐほどいのこ
とでもあるまい」

と幕が垂つ

「やー、なんでも中国の代表候補生なんだって
と他の女子が言つそれを聞いた春は

「その人なら昨日会つたよー」と言つた。すると

「どんな人！！」

と女子が食いついてきた

「えーっと、確か名前は凰 鈴音つて言つてたよ」

と言つそれを聞いた一夏は

「ま、まさかなー」

と呟いていた

「どうこうことだ（ですの）」

と田から殺氣を出しながらセシリ亞と簫が問い合わせる

「えーっと、簫がいなくなつた後の幼馴染」

とやばいと思つた一夏は話をそらす

「そういえば、クラス対抗戦がんばれよ

」といつとあおれに氣が付いた女子が

「簫ノ之君が勝つとクラスみんなが幸せだよー」

「簫ノ之君、がんばつてねー」

「フリー パスのためにもねー」

「田指せ、優勝！」

「それに、専用機を持つているクラスは1組と4組だけだし、勝てるよー」
話していると

「…………その情報、古いよ」

教室の入り口から声がした。

その声の方へ目を向けると鈴がいた

「鈴…………お前、鈴か?」

「あ、鈴さんだ」
と話していると

それは先日、春が出会った少女、鈴音であった。春はなんとなく予想できていたので反応は薄かつた。

「わうよ。中国代表候補生、凰鈴音。今日は宣戦布告に来たってわけ」
と話すが

「すまん……俺の専用機はダメージレベルが〇を超えていて代表は春に代わったんだ」
と言つ一夏、その声は沈んでいた、それを不審に思った鈴が聞こつとすると

「おー」

「なによー?」

鈴音は声をかけられて後ろへ振り向く、するとバシンンッーーーと鈴音の頭に強烈な一撃が加えられた。そこには、一組の担任、鬼教官千冬が立っていた。

「もつS H R の時間だ。教室に戻れ」

「ち、千冬さん……」

「織斑先生と呼べ。さつさと戻れ、そして入り口を塞ぐな。邪魔だ」とその気配をに怯えた鈴は

「し、失礼しましたー」

と言い全速力でクラスへ戻つて行つたが…………

「…………一夏、今のが凰 鈴音か?えらく親しそうだったな?」

「い、一夏さん!?!あの子とはどういいつ関係で……
とセシリ亞と暁が聞いつけとするが

「ほつ、私の話も聞かずに仲良くなお話か、いい度胸だな」と出席簿を三重に構えて暁とセシリ亞を呪いつけする千冬の姿があつた

「はつ……!」

と一人が氣づくが

「バゴンッ」

と鈍い音が響きセシリ亞と暁の頭に命中する。

卷之二

と頭を押さえて悶絶する一人がいた。昼食になり一夏が話しかける
が・・・・・

「お前のせいだ！」

—あなたのせいですわ！」

— なんてだよ ・・・・・ 「

まあまあ、簾さんもセシリアさんも落ち着いて」

雇休みに入ると筆とセシリアが一夏に文録を書いていた

「まあ、話ならメシ食いながら聞くから。とりあえず学食行こうぜ」

む・・・・・まあお前がそう語りのなら、いいだろ?」

「そうですね、行こで差し上げない」とせなくしてゐる

はやく行こ」
僕お腹すしかやつたよ!」

ああ行こへだ

と言いながら食堂に向かう。すると

「待つてたわよ、一夏！」

と食堂の真ん中でラーメンを持ちながら話す鈴。一夏は

「まあ、とりあえずそこどいてくれ。食券だせないし、普通に通行の邪魔だぞ」

「う、うるさいわね。わかってるわよ」

「ラーメン伸びるぞ」

「わ、わかってるわよ！ 大体アンタを待つっていたんでしょうが！ なんで早くこないのよ！」

と鈴の思いに気づかない一夏は突っ込む。がとりあえず、席を確保する4人と1人とここで、四人は食券を取りに行き、注文をする、そして4人が戻つてくると

「ねえ、一夏なんで、あなたのISダメージレベルDなんて事になつてんのよ、訓練でそこまでなるなんて聞いた事ないわよ」

「いや、実は・・・・・・・・・・・・

と話を始める鈴、それを3人はびくびくしながら聞いていた。

「あんたちは・・・・・・・・・・・・

と案の定怒る鈴と思われたが・・・・・・

「いい判断するじゃない」

と言いながら専用機甲龍を展開する。一夏はウソツクシ！ と言ひながら白式を展開しようとするとが間に合わず・・・

「死ねえつ一夏！」

と言ひながら双天牙月で切り掛かるが・・・・・・

「ギンツ」

と一夏の目の前でその攻撃は防がれた。攻撃が来ない事に気づいた

一夏が確認すると

「ほつ、こんな所でエスを展開するとはい一度胸だな」と近接戦用のブレードでその一撃を受け止める千冬の姿があった。それを見た鈴は即座にエスを解除して

「す、すいませんでした……」「正座で謝罪するが、

「私の弟に……」と説教を始める。それを見た春はこの人やっぱ、ブランコと思いかけ、ガシッ！と頭を掴まれる。何だ！！と思つていて、足が浮いた。そこから、千冬だと思うが……

「おい、春何か余計な事を考えていたな」と力が込められそこから先は考える事が出来ず

「ツツ、痛い！！！痛い！！！」

と泣き叫び、助けを求めるが、誰も助けようとしない……のではなく助けられない。

「こまま、死ぬのかなーー」と考え始める春だが、

「キンコーン……」

とチャイムが鳴り解放され地面に落下する

「た、助かった……」

と方向感覚が掴めない中自分の無事を喜ぶ春、すると

「大丈夫！？動ける？」
と声をかける鈴と

「おい、無事か！！」

と言い心配そうに声を掛ける一夏

「「」、ゴメン、大丈夫だから先に行つていいよ
と言いながら立とうとするが、立てずに一夏の方へと倒れる春

「春さん、本当にだいじょ・・・」

とセシリアが話しかけるが、その前に春は意識を失っていた

（保健室）

「「」つて？」

と言い目を覚ましたが夜だつた。誰かいないかと探すが誰もいな・・・
・・いた

鈴であるがその目は泣いていた。なぜと聞こつとすると

「ホントなんでもないからつ、じゃあね！」

と言い保健室から出て行つた、そしてその後保健室の教員が来たの
で戻るという事を伝えていまだに痛む頭の痛みをこらえながら部屋
へ帰る。

「あ、頭が」

と言い部屋に戻ると

「はーはー頭大丈夫ー」

と聞こながらベッドの上で転がるのほほんがいた

「まあ、なんとか」

と言しながらのほほんプレゼンの某世界的人気アニメポーモンの電
気ねずみのパジャマを着て

「おやすみー」

と聞こ寝る春の姿があつた

春と鈴（後書き）

はあ、タイトルを入力し忘れて書き直し疲れるー。とまあ、何かありましたらコメントお願いします

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0220y/>

春とIS

2011年11月23日15時45分発行